

篠島しのじまさのさ

蟹江尾八

「さのさ節」となる原調は、安政七（1778）年清国人の「金琴江」が長崎へ伝えてきた「明清楽みんしんがく」のうちの「九連環きゅうれんかん」であると言われている。この歌い出しの「かんかんのう」の旋律や踊りが民衆に受け、大坂を経て江戸にも入り、文化年間（1804～1818年）の末期から明治にかけて大流行した。

「さのさ」の囃しが付くまでは、「ヨイシヨイシヨ」「トサツサー」の時代があった。旋律としては男性唄で、その後寄席や花柳界に持ち込まれ、女性が歌うようになり、本調子化したと思われる。二上り調子で「郡上さのさ」と同じく、本調子の「さのさ」以前の形である。

篠島は、愛知県の三河湾の入り口に浮かぶ島で、歴史は古く慶長初（1596）年徳川家康から近隣の国の漁業権が与えられ、航海業者の往来が頻繁で、各地の文化が持ち込まれ、遊里の繁栄があったことが推察できる。

歌詞の中の「枕石」は「清正の枕石」とよばれ、篠島にある南風ヶ崎の花崗閃緑岩を切り出し、四〇〇年前の名古屋城築城の際、石垣に使われた。

その運搬には、堀川が使われ、かつて採譜した「堀川舟曳木遣り唄」を歌い音頭をとっていたことが伺える。